

英語基礎学力テストと TOEIC IP テストを通して見た

大学生の英語力の現状分析

藤岡美香子*

An Analysis of University Students' English Proficiency Level Based on English Basic Level Test and TOEIC IP Test Scores

by

Mikako FUJIOKA

(Received October 31, 2015)

Abstract

This paper analyses the scores of five TOEIC IP tests taken by the students at Tokai University Kyushu Campus since 2012 and presents a picture of the students' English proficiency level. Any correlations between their TOEIC IP test scores and the results of the English Basic Level Test, which basically all the Tokai University students take at the point of entrance will be examined. Based on these analyses, this paper will make some suggestions for the instruction of English at the school and for the better use of TOEIC IP test scores.

1. 研究の背景と目的

TOEIC(Test of English for International Communication)は、多くの企業で採用・配置・昇進などの判断材料の1つとして採用され、2014年度には日本での受験者総数が240万人を超えている。大学においては、TOEICテストを学生が就職の際の資格として活用するだけでなく、習熟度別クラス編成のためのプレイスメントテストとして利用する、英語科目の単位認定に活用する、入学試験の英語科目として採用するなど、重

要視される傾向が強まっている。このTOEICテストには、公開テストと団体特別受験制度(IPテスト)の2種類の受験方法がある。2つの試験方法は、原則として同一の難度のスコアを提供するものとされていて、大学等で広く実施されているのがIPテストである。2014年度の大学生のTOEICテスト受験者のうち、約40万人がIPテストを受験していた。

東海大学九州キャンパスでは、2012年にTOEIC IPテストの受験が可能になり、2015年9月までに、通算5回開催され、受験者数がのべ136人となった。一方、東海大学への入学生は、基本的に全員が英語基礎学力テストを受験し、そ

*東海大学熊本教養教育センター専任講師

の結果は、2013 年度以降のカリキュラムにおいては、8 単位が必修となっている「英語コミュニケーション科目」の習熟度別クラス分けなどに利用されている。

本研究は、まず、東海大学九州キャンパスの TOEIC IP テスト受験者の結果を分析する。そして、英語基礎学力テストの得点と TOEIC IP テストのスコアとの関連性を調査する。それにより、英語コミュニケーション科目の指導と就職活動や就職後の社会生活において重視される傾向がある TOEIC テスト受験に関連した指導をより有効なものにするために、現状を把握し、有益な示唆を与えることが本研究の目的である。

2. 先行研究

18 歳人口の減少、大学への入学者選抜の方法の多様化などの理由から、近年、大学入学者の英語力に大きなばらつきがあること、基本事項の復習、いわゆるリメディアル教育を行う必要のある入学者数が増加していることが頻繁に指摘されている。また、大学での英語教育は、その成果を客観的な数値で表すことが求められる傾向にある。このような状況の中、大学生の英語力の把握のためや大学で行われている英語カリキュラムを評価するための 1 つの方法として、大学生を対象に、入学時に受けた（入学試験を含む）英語能力試験とその後受験した外部テストのスコアとの関連が調査研究されている。TOEIC テストは、スコアの評価基準が一定に保たれ、英語力の客観的な目安として評価されているので（国際ビジネスコミュニケーション協会、2015）、TOEIC IP テストを外部テストとして採用している研究が多い。

新潟大学は、2005 年度に始まったカリキュラムで、外国語として英語の履修を選択した学生に、1 年次 1 学期末に TOEIC テストの受験を課している。この結果により、1 年次 2 学期以降の英語

科目の履修コースが決定される仕組みになっているが、2005 年 7 月受験の 2,199 名のデータをもとに、センター試験の得点との相関を調査した。その結果、センター試験と TOEIC の合計点、Reading Part のスコアは、それぞれに相関が強いことがわかった。また、センター試験と TOEIC の Listening Part のスコアは、合計点や Reading Part ほど強くはなかったが、比較的強い相関関係が見られた（中畝他、2006）。

大学入試センターは、センター試験本試験と追試験の難易度の比較のために、大学 1 年生を研究対象者とした調査を行っている（大津、2013）。平成 26 年度のモニター調査では、英検、TOEIC、TOEFL の 3 つの外部テストのスコアとの関係についても 368 名を対象に調査し、これらすべてとセンター試験英語科目の得点に関係があり、特に TOEIC のスコアとは強い相関があるという結果を得た。

千葉大学では、2003、2004 年度に学内で実施した TOEIC IP テストの 1,240 名分のデータをもとに、千葉大学の英語教育の現状を検証した（土肥、2006）。学部、学年、実施日別や自主受験と義務受験者の比較など、様々な観点から分析をしているが、その中で、複数回受験者の得点上昇量は、授業で英語を多く学んでいる 1 年次が多く、高学年になるほど少なくなる傾向があると考えしている。

3. リサーチ・クエスチョン

3.1 東海大学九州キャンパスの学生が受験した TOEIC IP テストの結果には、どのような特徴があるだろうか。

3.2 東海大学九州キャンパスの学生が受験した英語基礎学力テストと TOEIC IP テストの結果には、関連があるだろうか。

4. 調査方法

4.1 研究対象者

東海大学の九州キャンパス（熊本市、南阿蘇村）にある経営学部（2013年4月に総合経営学部から改組）、基盤工学部（2013年4月に産業工学部から改組）、農学部にて在籍し、2012年9月から2015年7月の間に学内でTOEIC IPテストを受験した136名のうち、何らかの理由で英語基礎学力テストを受験していない学生や、大学院生など、比較のためのすべてのデータが揃っていない受験者を除く116名が本研究の研究対象者である。学部や学科で受験を必須にしているところはなく、全員が学生自らの希望による自主受験者である。対象者の詳しいデータについては、以下の通りである。

表1 対象者の所属学部

経営学部（総合経営学部を含む）	24名
基盤工学部（産業工学部を含む）	9名
農学部	83名

表2 TOEIC IPテスト受験時の学年

1年	36名
2年	51名
3年	23名
4年	6名

表3 対象者のカリキュラム

旧カリキュラム	40名
新カリキュラム	76名

2013年4月、東海大学九州キャンパスでは「英語コミュニケーション科目」のカリキュラムが改編された。以前は、1つの科目の中で4技能すべてを学習する「初級英語」「初中級英語」「中級英語」「中上級英語」「上級英語」の5科目のうち、学生の習熟度に応じて、農学部では3科目（6単位）、その他の2学部では2科目（4単位）が必修であった。カリキュラム改編後は、全学部に

おいて、週に2コマ、15週履修する「英語リーディング&ライティング1」「英語リスニング&スピーキング1」「英語リーディング&ライティング2」「英語リスニング&スピーキング2」の4科目（8単位）が必修となった。標準的には1セメスターに1科目ずつ、2年修了時点まで必修英語科目を履修する。本研究では、2012年度までのカリキュラムで英語を履修した学生を「旧カリキュラム」、2013年度以降の入学生を「新カリキュラム」としている。

4.2 英語基礎学力テストについて

東海大学に入学した学生が、学部学科を問わず受験する英語基礎学力テストは、文法、リスニング、リーディングの3部門からなる合計100問の選択式試験である。問題数と試験時間は、文法30問（25分）、リスニング30問（約25分）、リーディング40問（45分）である。1問1点で、合計100点満点の試験だが、九州キャンパスでは、Rodriguez-Yagi（2012）に詳述のように、2011年度まで、問題により傾斜配点をしていた時期があり、100点満点ではなく、傾斜配点した212点満点の得点データしかない対象者が116名のうち26名いる。また、受験者の部門別の得点データは入手できない。

4.3 TOEIC IPテストについて

Listening PartとReading Partの2つのpartからなる合計200問の選択式試験である。問題数と試験時間は、Listening Partが100問（約45分）、Reading Partが100問（75分）である。各partの満点が495点、合計990点満点のテストで、スコアは、10～990点の5点刻みで出される。

5. 結果と考察

5.1 英語基礎学力テスト

4.2 で述べているように、本研究の研究対象者の英語基礎学力テスト結果は、100 点満点で出された対象者群と 212 点満点で出された対象者群がある。

表 4 英語基礎学力テストの平均点（全対象者）

平均点 / 満点（人数）	正答率
53.5 点 / 100 点 (90)	53.5%
125.1 点 / 212 点 (26)	58.9%

正答率が 53.5%と 58.9%ということで、傾斜配点をした 212 点満点のテストのほうが約 5%高くなっている。基本的な問題の配点を大きくし、基本事項を理解している学生とそうでない学生をより正確に識別することを試みた（Rodriguez-Yagi, 2012）傾斜配点の成果が、本研究の研究対象者の結果にも表れていると言えそうである。

英語基礎学力テストの満点が 212 点のグループを「1」、100 点のグループを「2」とした、学部別の平均点は以下のとおりである。基盤工学部の研究対象者は全員、英語基礎学力テストの結果が 100 点満点で出されているため、1つの対象者群「2」しかない。

表 5 英語基礎学力テスト学部別平均点

	平均点	正答率
経営学部 1（経営 1）(1)	72.0 点	33.9%
農学部 1（農学 1）(25)	127.2 点	60.0%
経営学部 2（経営 2）(23)	51.8 点	51.8%
基盤工学部 2（工学 2）(9)	48.5 点	48.5%
農学部 2（農学 2）(58)	55.5 点	55.5%

対象者群名後ろの（ ）内は人数

基盤工学部に「1」の対象者群はなく、また、経営学部 1 の対象者数は 1 名なので、結果が 100 点満点で出されている「2」の対象者群のみ分析

すると、正答率は農学部が最も高い。

英語基礎学力テストの満点が 212 点のグループを「1」、100 点のグループを「2」とした、学年別の平均点は以下のとおりである。1 年生の研究対象者は全員、英語基礎学力テストの結果が 100 点満点で出されているため、1つの対象者群「2」しかない。

表 6 英語基礎学力テスト学年別平均点

	平均点	正答率
2 年 1 (17)	122.4 点	57.7%
3 年 1 (7)	135.1 点	63.7%
4 年 1 (2)	112.0 点	52.8%
1 年 2 (36)	53.4 点	53.4%
2 年 2 (34)	55.0 点	55.0%
3 年 2 (16)	53.0 点	53.0%
4 年 2 (4)	44.7 点	44.7%

対象者群名後ろの（ ）内は人数

対象者数が 10 名に満たない「3 年 1」「4 年 1」「4 年 2」の正答率は、44%から 63%と大きな幅があるが、これらは対象者の数が少ないために個々の正答率の違いが大きく反映されているためだと考えられる。これら以外の対象者群の正答率はおおむね 55%前後であり、学年別の差はほとんどない。

5.2 TOEIC IP テスト

次に、本研究対象者が、2012 年 9 月から 2015 年 7 月の期間に、東海大学九州キャンパスにおいて受験した TOEIC IP テストの結果を分析する。研究対象者全体、学部別、受験時学年別、カリキュラム別の平均点と国際ビジネスコミュニケーション協会が公表している 2014 年度の大学生の TOEIC IP テスト受験者の平均点は、以下のとおりである。（ ）内は人数を表す。

表 7 TOEIC IP テストの平均点 (全対象者)

	Listening	Reading	Total
全 対 象 者 (116)	205.3	142.9	348.3

(単位:点)

表 8 TOEIC IP テストの平均点 (学部別)

	Listening	Reading	Total
経営学部 (24)	208.1	134.1	342.2
基盤工学部 (9)	196.1	116.6	312.7
農学部 (83)	205.6	148.3	353.9

(単位:点)

表 9 TOEIC IP テストの平均点 (学年別)

	Listening	Reading	Total
1 年 (36)	179.8	138.8	318.7
2 年 (51)	219.6	141.6	361.2
3 年 (23)	210.6	145.8	356.5
4 年 (6)	217.5	166.6	384.1

(単位:点)

表 10 TOEIC IP テストの平均点 (カリキュラム別)

	Listening	Reading	Total
旧カリキュラム (40)	213.7	142.0	355.7
新カリキュラム (76)	200.9	143.4	344.4

(単位:点)

表 11 TOEIC IP テストの大学生の平均点
(2014 年度分)

	Listening	Reading	Total
1 年 (209,469)	237	188	424
2 年 (101,562)	250	187	437
3 年 (66,856)	270	203	473
4 年 (23,607)	285	218	503

全体 (401,494)	248	192	440
--------------	-----	-----	-----

(単位:点)

(国際ビジネスコミュニケーション協会、2015)

・本研究対象者と大学生全体の比較

本研究の研究対象者と TOEIC IP テストを受験した大学生の平均点を比較すると、Listening Part が 205.3 点に対し 248 点、Reading Part は 142.9 点と 192 点、Total が 348.3 点と 440 点と、2 つの part で 40 点から 50 点の違いがあり、合計点は約 90 点の差があることがわかる。

・学部別の特徴

学部別に見ると、合計点は農学部が 353.9 点で最も高い。Listening Part のスコアは、経営学部が 208.1 点で一番高いのに対し、Reading Part のスコアは農学部が 148.3 点と最も高い。平均点の最高と最低を比較すると、Listening Part は 12 点しか差がないが、Reading Part はその差が約 32 点と大きくなっている。文法、読解力を測る Reading Part のスコアの差が学部間で大きいという結果が示されている。

・学年別の特徴

1 年生の Listening Part のスコアが 179.8 点で、他の学年に比べてかなり低いことがあげられる。これは、大学入学までの英語教育において、「聞くこと」をあまり経験してこなかった結果ではないかと推測できる。

・part 別のスコア

すべての比較群において、Listening Part のスコアのほうが Reading Part よりも高い結果が出ている。この傾向は、TOEIC IP テストを受験した大学生全体の結果においても同じであるが、これは、「Reading よりも Listening の能力のほうが高い」「Reading よりも Listening のほうが得意な学生が多い」ということを自動的に意味する

わけではない。TOEIC テストの運営、実施を行っている国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会が発行している公式ガイド (Educational Testing Service、2005) にもあるように、TOEIC テストでは、公表されていない独自のスケールを用いて正解数を換算し、各パート 5～495 点の範囲でスコアを算出している。Listening Part と Reading Part では、同じ正解数であっても換算後のスコアが異なると説明されているように、TOEIC テストの Listening Part と Reading Part のスコアをもってそれぞれの能力の優劣を自動的に評価することはできないのである。

・受験者数

受験者数の傾向としては、本研究対象者も全国的に見ても、学年が上がるごとに数が減っている。本研究対象者において 2 年生までは受験者数が維持されているのは、東海大学九州キャンパスでは、農学部の場合、新旧どちらのカリキュラムであっても、その他の 2 学部では、新カリキュラムの場合、2 年生まで英語コミュニケーションの必修科目を履修していることに要因があるかもしれない。必修科目として履修している間は、英語学習への意識や意欲、学習に費やされる時間がある程度確保されている。しかしそれ以降は、動機づけの低下、専門科目の実習や研究活動、就職活動等によって TOEIC テストの受験機会の確保が難しい、英語学習の成果がスコアとして表れず、自己の英語力に失望してしまうなどの理由で、受験者が減っているのではないかと考えられる。受験者数が減少しているのに反比例して、学年別の平均点は上昇しているのは、前述のような状況の中で自主的に TOEIC IP テストを受験するのは、それらの問題を克服している、比較的高いスコアを取ることができる人に絞られるからだと考えられる。

・カリキュラム別の特徴

Reading Part の平均点はあまり変わらないが、Listening Part は旧カリキュラムで学習した研究対象者の平均点が 13 点ほど高く、その結果、合計点も約 11 点高い。4.1 で述べたように、新旧のカリキュラムは、卒業に必要な単位数や修業年限に違いがあるが、ここでの差はむしろ、受験時の学年によるものだと考えられる。つまり、2012 年度までに入学した旧カリキュラムの学生は、本研究においては、比較的高学年で TOEIC IP テストを受験した研究対象者ということになる。前項で述べたように、高学年で受験するのは、比較的高いスコアを取ることができる学生なのである。

5.3 TOEIC IP テスト複数回受験者

2012 年 9 月以降 5 回実施された TOEIC IP テストを複数回受験している研究対象者の結果を分析すると、のべ 116 名の研究対象者の中で、12 名が 2 回受験していて、3 回以上受験した者はいなかった。2 回の受験の間隔は、5 か月～1 年 9 か月であった。2 回の受験の上昇量については以下のとおりである。

表 12 複数回受験者数 (学部別)

経営学部	3 名
基盤工学部	1 名
農学部	8 名

表 13 複数回受験者数 (学年別)

受験時学年	受験者数
1 年 / 1 年	1 名
1 年 / 2 年	3 名
1 年 / 3 年	1 名
2 年 / 2 年	1 名
2 年 / 3 年	6 名

表 14 複数回受験者の TOEIC IP テスト平均点

	Listening	Reading	Total
1 回目平均点	225.0	159.5	384.5
2 回目平均点	248.3	159.1	407.4
上昇量	23.3	-0.4	22.9

(単位：点)

Total の平均点は約 23 点上昇しているが、Listening Part の上昇量が 23.3 点で、Reading Part はわずかながら下がっていて、伸びていないことがわかった。つまり、2 回の受験における上昇分は、Listening 力の伸びのみによるものである。

表 15 初回受験時 1 年生の上昇量

平均点	Listening	Reading	Total
1 回目平均点	205.0	152.0	357.0
2 回目平均点	241.0	149.0	390.0
上昇量	36	-3	33

(単位：点)

表 16 2 年/3 年での 2 回受験者の上昇量

平均点	Listening	Reading	Total
1 回目平均点	250.0	169.1	419.1
2 回目平均点	255.8	175.0	430.8
上昇量	5.8	5.9	11.7

(単位：点)

受験の時期による違いを見ると、千葉大学における先行研究で土肥（2006）が指摘しているように、本研究対象者も上昇量は 1 年時に受験を始めたほうが、高学年での受験よりも上昇量が多い傾向が見られた。しかしこれは、複数回受験者の上昇分が Listening Part のみの上昇量であること、5.2 で指摘したように、1 年時に受験した対象者の Listening Part の平均点が他の学年に比較してかなり低くなっているという 2 点を考慮すると当然とも言える。最初の点数が低いほど上がりやすいという傾向は、議論の余地がないだ

ろう。

また、2 年時と 3 年時に 1 回ずつ受験した複数回受験者の平均点は、2 年時受験生、3 年時受験生のそれぞれの平均点と比較すると、1 回目（2 年時）は 58 点、2 回目（3 年時）は 74 点も高い。研究対象者の中では、比較的高得点の受験者集団だと言えることができ、最初の点数が低めの集団に比べると点数が上がりにくいことは予想できる。しかし、比較的高得点のこの集団についても、大学生の受験者の平均点（Listening Part: 248 点、Reading Part: 192 点、Total: 440 点）には届かず、国際ビジネスコミュニケーション協会（2015:23）が「通常会話で最低限のコミュニケーションができる」としている 470 点までのレベルに留まり、「日常生活のニーズを充足し、限定された範囲内では業務上のコミュニケーションができる」としている 470～730 点のレベルには達していない。

5.4 英語基礎学力テストと TOEIC IP テストの関連

英語基礎学力テストと TOEIC IP テストの Listening Part、Reading Part、Total との間にどのような関係があるかを標本相関係数を用いて検証した。研究対象者全体、学部別、受験時学年別、カリキュラム別の標本相関係数は、以下のとおりである。英語基礎学力テストの満点が 212 点のグループを「1」、100 点のグループを「2」とし、標本相関係数を算出するのに必要な標本数に足りない「経営 1」と「4 年 1」は除外されている。また、基盤工学部、1 年生、新カリキュラムの研究対象者は全員、英語基礎学力テストの結果が 100 点満点で出されているため、1 つの対象者群「2」しかない。

表 17 英語基礎学力テストと TOEIC IP テストの標本相関係数

対象者群	Listening	Reading	Total
全体 1 (26)	0.36*	0.61**	0.60**
全体 2 (90)	0.50**	0.57**	0.60**
経営 2 (23)	0.50**	0.68**	0.68**
工学 2 (9)	0.60*	0.67*	0.71*
農学 1 (25)	0.33**	0.59**	0.57**
農学 2 (58)	0.52**	0.51**	0.56**
1 年 2 (36)	0.63**	0.59**	0.74**
2 年 1 (17)	0.27**	0.62**	0.55**
2 年 2 (34)	0.67**	0.73**	0.78**
3 年 1 (7)	0.34	0.68*	0.61
3 年 2 (16)	0.27	0.77**	0.55*
4 年 2 (4)	-0.02	-0.45	-0.27
旧カリ 1 (26)	0.36*	0.61**	0.60**
旧カリ 2 (14)	0.45	0.19	0.34
新カリ 2 (76)	0.54**	0.69**	0.69**

* : 上側検定 5%水準で有意

** : 上側検定 1%水準で有意
対象者群名後ろの()内は人数

研究対象者が 4 名しかいない「4 年 2」だけが、他の対象者群と大きく異なる傾向を示している、これは除外して全体像を概観したい。

英語基礎学力テストと TOEIC IP の合計点は、「旧カリ 2」の 0.34 以外は、標本相関係数が 0.55～0.78 と強い相関関係があると言える。part 別では、これも標本相関係数が 0.19 の「旧カリ 2」を除くと、0.51～0.77 の Reading Part のほうが、0.27～0.67 の Listening Part よりも英語基礎学力テストと強い相関があると言えそうである。対象者群別で比較しても、Listening Part との相関係数のほうが大きいのは、「農学部 2」(Listening Part 0.52 に対して Reading Part 0.51)、「1 年 2」(Listening Part 0.63 に対して Reading Part 0.59)、「旧カリ 2」(Listening Part 0.45 に対し

て Reading Part 0.19) だけである。新潟大学での先行研究(中畝他、2006)と同様に、東海大学の英語基礎学力テストの得点も、TOEIC IP テストの合計点、Reading Part のスコアと強い相関関係にあり、Listening Part もこれら 2 つよりは弱い、相関関係があると言える。

・学部別の特徴

経営学部と基盤工学部の傾向は似ている。農学部の場合、「1」は Listening Part との関係がやや弱く、「2」は比較的強いという結果で、学部別に際立った特徴はない。

・受験時学年別の特徴

1 年生は若干ではあるが、Reading Part よりも Listening Part との関係が強い。その後、「2 年 1」と「3 年 1」、「2 年 2」と「3 年 2」をそれぞれ比較すると、学年が上がるにつれて、Reading Part との相関関係が強くなる傾向がある。

・カリキュラム別の特徴

「旧カリ 1」と「新カリ 2」は、英語基礎学力テストと TOEIC IP の合計点、Reading Part のスコアは強い相関関係があり、Listening Part はこれら 2 つよりは弱い、相関関係があるという全体的な傾向と類似の傾向を示している。しかし、「旧カリ 2」は、Listening Part のスコアとは比較的強い相関関係があるが、合計点や Reading Part のスコアは関係がない、または非常に弱そうであるという結果を示していて、カリキュラム別の特徴は見られない。

・英語基礎学力テストの傾斜配点の有無による特徴

傾斜配点した「1」と行わなかった「2」の対象者群を、それ以外の要素は同じ対象者群と比較すると、「全体 2」の 0.50 に対して「全体 1」の

0.36、「2年2」の0.67に対して「2年1」の0.27のように、Listening Part との相関関係は「2」のほうがより強いことがわかる。つまり、2013年度の新カリキュラム導入とともにすでに廃止されているこの傾斜配点を行わずに100点満点で得点を出したほうが、英語基礎学力テストの得点からTOEICテストのListening Partのスコアをより正確に予測できる可能性がある。

6. リサーチ・クエスチョンの検証

6.1 東海大学九州キャンパスの学生が受験したTOEIC IP テストの結果には、どのような特徴があるだろうか。

全国の大学生の平均点と比較して、Listening Part、Reading Part とともに差があり、合計で約90点の違いが見られた。その中で、「Listening PartのスコアのほうがReading Partのスコアよりも高い」「学年が上がるごとにTOEIC IP テストを受験する学生は減少する」「学年が上がるごとにTOEIC IP テストの平均点は上がる」という全国の大学生に共通する傾向も見られた。

また、学部間の比較ではReading Partのスコアのばらつきが大きいこと、学年別の特徴としては、1年生の受験者のListening Partのスコアが他の学年と比較してかなり低いこともわかった。複数回受験者の結果からは、Listening Partのスコアしか伸びず、Reading Partはほとんど伸びていないことが明確になった。

6.2 東海大学九州キャンパスの学生が受験した英語基礎学力テストとTOEIC IP テストの結果には、関連があるだろうか。

英語基礎学力テストは、TOEIC IP テストの合計点、Listening Part、Reading Part のすべてと相関関係があった。part 別では、Listening Part よりもReading Part との相関関係のほうが強く、若干ではあるがReading Part よりも

Listening Part との関係が強い1年時から、学年が上がるにつれて徐々に、Reading Part との相関関係が強くなる傾向が示唆された。

英語基礎学力テストにも30問のリスニング問題が含まれているが、部門別のスコアは入手できないため、英語基礎学力テストとTOEIC IP テストの各部門の相関関係を分析することはできない。しかし、本研究の結果から、英語基礎学力テストで測られる英語力は、TOEIC IP テストのReading Part で測られる英語力に近い可能性が示唆されている。

7. 結論

これらの結果が、大学での英語教育、それに携わる教師にどのような示唆を与えているかを考えたい。

(1) 本研究の対象者である東海大学九州キャンパスのTOEIC IP 受験者の結果においては、全国の大学生の平均点と差があること、Reading Part のスコアが学部間でばらつきが大きいということ、複数回受験した際にReading Part のスコアはほとんど伸びていないという特徴が浮かび上がった。TOEIC テストのReading Part のスコアは、語彙力との相関関係が強いことが、古家・藤岡(2006)で実証されているので、Reading Part のスコア、そして合計点を伸ばすためには、語彙力をつけることを意識した指導や学習が必要だと言える。Reading Part のスコアが低い傾向にあった学部の学生への指導においては特に効果を発揮するだろう。

(2) 英語基礎学力テストは、TOEIC IP テストの合計点、Listening Part のスコア、Reading Part のスコアのすべてと相関関係があり、part 別では、Listening Part よりもReading Part との相関関係が強い傾向が示された。TOEIC テストで

測ることができるのは、個人の持つ英語力の一端にすぎないとしても、大学での英語教育の成果を客観的なデータで示すことは今後、これまで以上に求められるようになるだろう。英語の基本事項の習得が十分ではない学生が増え、その指導が中心になる傾向がある中、入学時に行われるテストを活用し、可能性の高い学生に対して早い時期から、客観的に測ることが可能な形で英語力を伸ばすための学習支援体制を作っていくことも必要だろう。大学在学中に客観的な英語力の伸びを見せる学生が増えていくことは、英語教育に携わる教員、そして大学での英語教育全体にとっても意味があることだと考える。

(3) 今後の課題

受験機会の提供に終わっていた学内での TOEIC IP テストについて、簡易的なものではあるが、分析し現状の一端を数値化して示したことは意義があったと考える。しかし、116 名分という限られた数のデータをもとにした結果であることと、2012 年度に学内での TOEIC IP テストの受験が始まり、その年度の入学生が現在 4 年生に在籍している、比較的短期間の傾向を分析対象としているため、学年別の傾向や英語力の推移について、より正確に分析することは今後の課題である。

また、複数回受験している学生は、2 回受験者が 12 名という現状であった。今後、TOEIC IP テストの受験機会を継続的に提供することで、複数受験者の数も増え、3 回以上受験する学生も出てくるものと思われる。その中で、受験回数、受験間隔などもっと多くの要素を考慮して英語力の変化を考察することも可能になるはずである。

謝辞

本研究のデータの統計処理に関して、東海大学熊本教養教育センター教授今田恒久先生に、いろいろとご助言をいただき、また、計算処理を行っていただきました。武蔵野大学グローバル・コミュニケーション学部教授古家聡先生には、本論文をまとめるにあたり、貴重なご意見をいただきました。ここに、各位に深く感謝申し上げます。

参考文献

- 1) Educational Testing Service (2005) 『TOEIC テスト新公式問題集』国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会
- 2) Rodriguez-Yagi, Miki (2012) 'Analysis of the 2009 & 2011 Placement Tests' Proceedings of School of Agriculture Tokai University, Vol.31, pp.39-44
- 3) 大津 起夫 (2013) 「標準化英語試験とセンター試験英語科目得点との関係分析」『リスニングテスト実施結果や成果等を検証し、その改善を図るための調査研究』大学入試センター
- 4) 国際ビジネスコミュニケーション協会 (2015) 『TOEIC プログラム DATA & ANALYSIS 2014』国際ビジネスコミュニケーション協会
- 5) 土肥 充 (2006) 「TOEIC IP による千葉大生の英語力の現状分析」『人文と教育』第 2 号、pp.15-29
- 6) 土肥 充、柳瀬弘美 (2009) 「千葉大学における TOEIC IP スコアの包括的分析」『言語文化論叢』第 3 号、pp.31-45
- 7) 中畝菜穂子、熊谷龍一、五島譲司 (2006) 「TOEIC テスト結果と入学時および入学後の英語成績との関連」『新潟大学大学教育開発研究センター大学教育研究年報』第 11 号、

pp.43-49

- 8) 古家 聡 (2005) 「大学における英語教育改革―武蔵野大学人間関係学部の事例研究」『武蔵野大学人間関係学部紀要』第 2 号、pp.87-97
- 9) 古家 聡・藤岡美香子 (2006) 「大学生に求められる英語語彙の分析」『武蔵野大学人間関係学部紀要』第 3 号、pp.75-87
- 10) 古家 聡・藤岡美香子 (2008) 「リーディングとリスニングにおける大学生の英語語彙力の比較」『武蔵野大学人間関係学部紀要』第 5 号、pp.13-27
- 11) 古家 聡・藤岡美香子 (2011) 「語彙のリスニング・リーディング別の習得傾向と TOEIC スコアとの相関関係」『東海大学総合経営学部紀要』第 4 号、pp.75-87